



[第3回]

領国貨幣をどこで存知ですか？

領国貨幣が生まれるまで

わが国で初めて本格的に流通した貨幣は、708年に铸造された「和銅開珎」とされています。その後、各種の銅貨が铸造されましたが、10世紀末には政府の弱体化もあって铸造されなくなります。その頃と前後して、中国からの貨幣の輸入も積極的に行われるようになります。室町時代には渡来銭をまねた模造銭や私铸銭も出まわり、貨幣は国内で広く使われるようになっていきました。

戦国時代になると、各地で金山銀山の開発が進んだことを背景に、戦国大名たちが独自に金銀貨の铸造を始めます。戦功のあった者への恩賞に用いたり、武器を購入するための資金としました。このほか、当時、金銀は輸出品としても重要な位置を占めたことから、中国との交易などにも盛んに使用されまし

た。金銀を中心とする貨幣の保有量が戦国大名の存立を支える重要な要素となっていたのです。

江戸時代に入ると、商業や工業の発展にあわせて貨幣の需要はどんどん増大していきます。そのため、幕府の制定した金銀銭貨だけでは、日本国中で必要となる貨幣が不足する事態となりました。これを受け、各大名の領国で戦国時代から铸造されてきた金銀貨を、原則的に自分の領国内にのみ通用させることとして铸造を許可しました。大名領国で铸造・発行した貨幣を「領国貨幣」と呼びます。

領国貨幣は約150年にわたって流通しましたが、江戸幕府が铸造した金銀貨が全国に普及するようになると、ほとんどがその役目



参考資料：「図録日本の貨幣1・2」東洋経済新報社、「貨幣」東京堂出版、「お金から見た幕末維新」祥伝社、「日本銀行金融研究所」(HP)「八十二文化財団」(HP)「おかねの情報室」(HP) など

を終えました。

主な領国貨幣、甲州金の歩み

領国貨幣として有名なのが、越後上杉氏、小田原北条氏、周防大内氏、甲斐武田氏など戦国大名が領内の鉱山を開発して鑄造したものです。ことに武田信玄が活躍した時代である16世紀半ば頃に鑄造が始まったといわれる「甲州金」は、その貨幣単位が江戸幕府の統一貨幣にも影響を与えるなど代表的なものです。甲斐の国で通用したこの金貨は、別名「甲金」「甲判」ともいわれました。

金の含有率が8割以上と高品位な甲州金をつくるためには、金の精錬や品位の鑑定技術などが重要で、こうしたノウハウが甲州金の信用の基礎となっています。また、甲州金は、下表のような7段階の4進法・2進法の貨幣単位とされ、このうち「両」「分」「朱」という単位は、江戸時代の金貨の単位として

も受け継がれていきます。

元禄時代に入って幕府が統一貨幣を鑄造し、各領国の在来貨幣の通用を停止した際に、甲州金も鑄造停止を指示されました。しかし、甲州金の存続の願い出がなされ、結局、元禄金に準じて改鑄することで領内での存続が例外的に許可されます。こうして「甲州金」のみは、幕府公認の地方貨幣として、例外的に19世紀前半にいたるまで流通しました。

甲州金の貨幣単位

- ① 両 (約15g)
- ② 分=1/4両
- ③ 朱=1/4分
- ④ 朱中 (しゅなか)=1/2朱
- ⑤ 糸目 (いとめ)=1/2糸中
- ⑥ 小糸目=1/2糸目
- ⑦ 小糸目中=1/2小糸目

さまざまな領国貨幣

領国貨幣としては、甲州金のほか、加賀の小判・銀貨、越後の小判、津軽の銀貨など有名ですが、全国でどれくらい存在したのでしょうか？

ある資料によれば、領国貨幣は金貨が23カ国、銀貨が20カ国で用いられたとの記述がありますが、実際には金貨の使用例は少なく、甲斐、加賀、越後の三国しか確認されていないようです。また他にも、銀貨が用いられた地域を28カ国とする説や30カ国とする説もあります。

領国貨幣はお国によりその通用の仕方が違っていることから、なかなか正確にはその実態が把握できていませんが、存在が確認されている領国貨幣の金銀貨の貨幣名と通用国を紹介すると、右表のとおりです。

領国貨幣（金貨・銀貨）一覧

| 甲斐 | 陸奥 | 出羽 | 加賀 | 越後 | 佐渡 | 因幡 | 出雲 | 周防 | 豊前 | 領国名 |
|-------------------------------|--|-----|---------------------------------|---|-----------------------|---------|-----------------------|----|----|-----|
| 古金 新金 甲斐金 甲重金 甲定金 | | | 加賀小判 | 高田小判 円小判 | | | | | | 金貨 |
| | | | 梅鉢壹両 吹人名 才一 甲介 又右衛門 | 桐 越州 高田 桐花押 | | | | | | 極印 |
| | 津軽銀 尾太(おつぎ)銀 | 秋田銀 | 花陸銀 | 越後銀 新極印銀 朱染織封銀 | しかみ銀 | 佐渡銀(印銀) | 雲州銀 山口余極印銀 平田判銀 | | | 銀貨 |
| | 弘前宝 尾太 窪田院内野代 湯沢橋手角館 矢羽極 龜甲梓 花陸壹拾両 | | 次(菊花模様) | 大徳・永長 五角形梓 永宝・長 (表)徳・通 (裏)定・印 丸形又は 四角枠定 | 木爪・宝 山口余 菊・菊と木爪 | | | | | 極印 |

本表は「貨幣」東京堂出版を参考に作成